

マタイ 14 : 22 - 33 「水の上を歩く」

イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。

1 不安な時代

不安な時代をわたしたちは生きております。時代の波はうねっております。時代の風は吹きすさんでおります。不安な時代のただ中であって、わたしたちの人生は嵐にもまれる小さな舟のようであります。いにしえのスコットランドの漁師が、このような祈りを残しております。

ああ、神さま
よろしくおねがいします
海は、すっごく広いのに
おれの船は、ちっぽけだから

わたしたちはみな世界という海を旅する旅人であります。みんな自分自身の、それぞれの人生という小さな舟に乗って進んでおります。大変小さな舟でありまして、しょっちゅうゆれ動いてしょうもありません。

主イエスキリストの12人の弟子たちが自分たちだけで舟に乗りこみ、イエスさまを岸边に残して湖に漕ぎ出した時、この船旅はきっと上手く行くと信じて疑いませんでした。自分たちはみな漁師である。小さい時から湖と一緒に生きて来た。湖のことは何でも知っている。まかせておけ。何の心配もいらない。すべて上手く行く。

しかし湖の真中へ来ましたとき、逆風が吹いてまいりました。12人の屈強な男たちがオールを漕いでも漕いでも1ミリだって進みやしません。いったいどうしたんだ。こんなはずじゃなかった。どうしたらいいんだ。不安の中へつき落されて、思い悩みました。

わたしたちもこういう経験をするであらうでしょう。大丈夫だ。小さい時から知っている。慣れている。自分は何でもわかっている。これまで何の問題もなかった。まかせておけ。全部上手く行く。出来てあたりまえじゃないか。そういう自信が粉々にくだかれる瞬間がやってまいります。人生の嵐であります。

2 イエスの不在

あれ、おかしい。こんなはずじゃなかった。どうしたんだろう。だめだ。もうできない。誰か助けて！ わたしたちの心の叫びであります。だれか助けてくれる人がいないだろうか？ 周りを見回してみる。でも周りもみんな自分と同じに叫んでいる。もうできない。誰か助けて！

1 2 人の屈強な男たちというのは、風が吹く前の弟子たちの姿です。ひとたび逆風が吹きますと、もう無力な1 2 人であります。だめだ。できない。誰か助けて！ 周りを見回しても、無力な1 2 人の男が小さな舟にひしめきあっているだけです。全員同じに叫んでいるのです。もうだめだ。誰か助けて！

不安な時代というのは、まさにこれです。こんなはずじゃなかった。誰か責任を取って、きちんと解決しなきゃだめだ。責任を取るのは誰だ？ 海江田か？ 枝野か？ 菅か？ しかし、いまの時代にあっては、すべての人が同じに叫んでいるのです。もうだめだ。誰か助けて！

主イエスキリストと一緒に舟に乗っていたまわらないということが、不安の原因であります。

18世紀のイギリスにジョン・ウェスレーという若き牧師がおりました。彼はイギリスの植民地でありましたアメリカのジョージアに渡りまして、その住民に伝道しようとの意気に燃えておりました。1735年10月14日（火）の日記です。「わたしは弟チャールズと共にジョージアへ渡るために、午前9時頃、舟に乗った」 10月24日（金）「海が荒れたので、船客の多くは弱りはてた」 1736年1月17日（土）「多くの人々が逆風のために気がひどくいら立った。夕方7時頃、彼らは嵐のために黙らされてしまった。嵐はいよいよ猛威をふるい、夜9時頃になって激しい波が頭上でくだけて、船首から船尾へ飛び越えて行ったり、波しぶきが船室の窓から入ったりした」 1月23日（金）「夕方、嵐が再び来る。翌朝ますます猛烈となって来た。わたしは『おまえは信仰がないのか？』と自分自身に言わざるを得なかった。まだ死ぬのがいやだったからである」

すっかりおじけづいてしまったウェスレーは、一緒に舟に乗りこんでいたドイツのモラヴィア派のクリスチャンたちに会いに行くことにしました。1月25日（日）「夜7時、ドイツ人たちを訪問。彼らが礼拝を始めて讃美歌をうたって

いる最中、大波が舟の上にくだけ散って、一番大きな帆をひきちぎり、舟を呑み込んで上下の甲板に流れ込んできたので、わたしたちは海の底に沈んだかと思った。イギリス人の中から怖ろしい金切り声が起った。ところがドイツ人たちは上を見上げ、讃美歌を中断せず、静かに歌いつづけた。礼拝が終わったあと、わたしは彼らにたずねた。『恐ろしくありませんでしたか？』『ありがたいことに、恐ろしくありませんでした』『でも、ご婦人たちとお子さんたちは恐ろしかったんじゃないませんか？』『どういたしまして。婦人たちも子どもたちも、死を恐れていません』と彼らはおだやかに答えた」

いったい何が違うんだろう？ 彼らはキリストを持っているが、わたしは持っていない。若きジョン・ウェスレーは、そのことを悟りました。いったい、おのれの心の中に生ける復活の主イエスキリストを持っているか持っていないか。嵐になると、これがはっきりしてまいります。

3 近づきたもうイエス

ここにはイエスがおられない。もうだめだ。しかしそれは、イエスがわれわれを見捨てたもうという「しるし」では、ありません。イエスは、われわれを救い出すため、ひと足ひと足近づきたもう。ひと足ひと足近づきたもう主イエスキリストであります。マタイ14章25節「夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた」 なんでもっと早く来てくれないんだ？ ゆっくり過ぎるじゃないか？ 夜明けまで待たせるなんて？ 一足飛びに飛んで来てくれたらいいじゃないか？ わたしたちは短気であります。しかしイエスは、ひと足ひと足近づきたもう。だからわたしたちは、いましばらく、この不安な時代のただ中であって、舟をもみくちやにされながら、待たなきゃならない。恐れと不安の中で待たなきゃならない。待たされている間にわたしたちは、自分が本当はどういう者なのか思い知らされることになります。自分は何でもわかっている。これまで何の問題もなかった。まかせておけ。全部上手く行く。出来てあたりまえじゃないか。そう思っていたのは、うわべだけだった。ほんとうは無力な、自分で自分を救うことのできない存在だ。イエスがおられなければ、どうしようもない存在だ。そのことを思い知らされるのであります。

ジョージ・マクドナルドはこう申しました。「神よ、わたしの祈りは、偽りのわたしから流れ出ます。しかし、あなたの答えのみが、わたしを本当のわたしにしてくださるでしょう」

4 嵐の中に立つ

ひと足ひと足近づきたもうイエスは、いまや12人の弟子たちの舟まで来られました。主イエスキリストは、嵐の中にあって超然と水の上に立っておられます。主イエスキリストこそ盤石不動、絶対の安心立命の根本であります。水は荒れ狂っております。風は吹きすさんでおります。舟は小さいままです。12人は無力なままです。状況は何も変わっていないです。しかし主イエスキリストは超然、水の上に立ちたもう。主イエスキリストが今や、われらと共にいましたもう。これがわれわれの盤石不動、絶対の安心立命の根本であります。何がどうしてどうなったということではない。何がこうしてこう解決したということではない。ただ主イエスキリストわれらと共にいましたもう。それゆえの安心であります。マタイ14章27節「イエスはすぐ彼らに話しかけられた。『安心なさい。わたしだ。恐れることはない』」 実に主イエスキリストこそ、われらの安心であります。

するとペトロが申しました。「わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」 イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけた。(28-30節)

盤石不動、絶対の安心立命の根本であります主イエスキリスト。わたしたちの心が、ただこのお方にフォーカスしておりますならば、わたしたちは安心を経験いたします。いかなる状況にあっても超然としておることができます。しかしわたしたちの心が、主イエスキリストでない、ほかのことにフォーカスするならば、とたんにわたしたちは安心を失います。わたしたちの心のフォーカス、焦点、心を集中している先は、いったいどこにありますか？ 政治を見るなら、株式市場を見るなら、放射線の線量計を見るなら、わたしたちは安心を失います。わたしたちが一心不乱にただ主イエスキリストを見つめているならば、ただ主イエスキリストに心がフォーカスしているならば、わたしたちは安心を得ます。安心を得たならば、わたしたちは冷静に政治に対処し、冷静に株式市場に対処し、冷静に放射線に対処することができるであります。安心から来るところの能力であります。わたしたちに問われておりますのは、わたしたちの心が何にフォーカスしているか、ということであります。わたしたちの罪をすべて身代わりにかぶり、十字架にかかり、三日目に復活し、死に打ち勝ち、永遠のいのちを授けてくださる主イエスキリスト。このお方に。ただこのお方に。ただこのお方のみに心を向けてまいりましょう。